

近世におけるスペイン語 歯擦音素の変遷について

原 誠

このたびの日本ロマンス語研究会の発足を心から嬉しく思う。筆者は 1962 年から同 64 年にかけての滞西中に、63 年 10 月から 64 年 5 月にかけて Madrid 大学哲文学部ロマンス語学科における Dámaso Alonso 教授の「ロマンス語学」の講義を聴く機会を得たが、それを契機として日本におけるロマンス語学研究の必要とその立遅れとをそれまで以上に痛感するに至った。しかし反面においては日本におけるロマンス語学研究への筆者自身の貢献ということを考えてみた場合、目分自身の無力なことにただただ呆然とせざるを得なかった。筆者はまず第一にラテン語の知識がほとんど皆無である。フランス語は Martinet の *Economie* を読むのに大汗をかく仕末、イタリア語、ポルトガル語は辞書を片手に適当にごまかすことしか知らず、ルーマニア語および、ロマンス語学研究に従事するには必要不可欠であるドイツ語については無知に等しい。これは日本人のロマンス語研究者に多かれ少かれ見られるハンディキャップであろうが、それにしても筆者の場合にはひどすぎる。ロマンス諸語のうちの一語を母国語とする研究者であれば、他のロマンス諸語は我々にとっての鹿児島弁、あるいは関西弁ぐらいに相当するのではなからうか。しかももう一つのハンディキャップがある。それは我々がロマンス諸語の話されている現地に居住していないということである。それどころか地球全体という観点に立てば、現地とはほとんど正反対に等しいような場所に生きているのである。

このように考えて来ると我々の研究の将来について大いに悲観的にならざるを得ない。我々の研究会においても当分の間はロマンス語に属する各語の専門家一人一人がそれぞれの専門語における、ロマンス語学のレベルに立っての問題点の紹介に終始するのではないかと思う。もしかりに当分の間の我々の使命がそういったことにあるとすれば、筆者が本研究会に対してなし得る貢献の内容も目ずから定まって来ようというものである。実は筆者にはそれしかできないというのが本音であるが、つまりロマンス語学という次元に立って考えてみても——このこと自体が相当に困難な仕事であるが——大に関係深い、あるいは興味深いと思われるスペイン語学上の問題点を諸權威の前に提示することがそれである。当分の間この仕事を続けることをお許しいただけるとすれば、今回はその第一回ということになる。

折良く筆者が勤務している東京外語大に昭和 41 年度から大学院修士課程が設置され、その資格も能力もない筆者までも狩り出されて、「スペイン語学研究」という最も重要な科目を担当させられる破目となった。仕方なく選んだテーマは「中南米スペイン語の成立過程」というのであったが、筆者の関心はむしろ別の所にあったのである。つまり当初は「中世スペイン語に存在していた /s/, /z/, /ts/, /dz/, /ʃ/, /ʒ/ という六つの歯擦音素は現在では Castilla では /s/, /θ/, /x/ の三音素に、またそれ以外の諸地方では /s/, /x/ の二音素に減じてしまっているけれども、それまでに至る変化のどの段階で中南米へ運ばれて行ったのか」という疑問に対する解答を求めていたのである。そのために四人の学生諸君とともにいくつかの文献を読んでみたが、その結果上記の疑問に対す

る解答以外に付随的に色々な問題点が明るみに出て来た。本稿はそれら問題点を紹介し、かつもし私見があればそれを追加・披瀝することを目的としている。

まず最初に我々が読んだ文献は Amado Alonso の *De la Pronunciación Medieval a la Moderna en Español*, I, Madrid, 1955 である。この書は Alonso 自身が完成したものではなく、彼の死 (1952) 後 Rafael Lapesa によって加筆・上梓されたものである。その第 I 巻は B と V, D, C と Z の三章から成り、もちろん目下の我々は C と Z の部分にのみ注目したわけである。これはいってみれば非常に周到に配列された文献資料集のようなもので、諸家の諸説を引用し、またイタリヤ語、フランス語、英語、さらにはスペイン語等による C と Z に関する記述を多量に羅列したのち、彼なりのまとめを出しているのである。その彼なりのまとめをさらに要約してみると、「ç と z とは無声/有声の関係に立つ破擦音であったが、その破擦性が稀薄となって舌尖歯音に変化して行く。その際順序としてはより弛緩して調音されていた z の方が ç よりも先に摩擦音化し、ç はいくらか最後までその破擦性を保った。それと平行するかのように z の無声化が起るが、それはまず ç と z との文字の上での混同に始まり、ついには両者の同一化に終る。その後に来るのが siseante 的音色から ciceante 的音色への移行で、その消極的な証拠なら既に 16 世紀に見出される。」とでもなろうか。これだけの知識なら一般のスペイン語史の書物からでも得ることが出来る。しかしこれら重要な音変化のそれぞれにつきおおよその日附を、諸文献の丹念な対照・比較により導き出したところに我々はこの書のとりえを感じた。おかげで我々は [d̥z] が [z] になったのがだいたい 1535 年頃、さらにそれが無声化して [s] になったのは 16 世紀末の 80 年代、また [fs] が [s] になり終ったのは 1620 年、さらに両者が [θ] になり始めたのが 17 世紀初頭、なり終ったのが 18 世紀中葉であること等を知ることができた。これだけ正確な日附を出した書がそれ以前にはなかったという意味でこれは貴重な収穫である。

次に我々が読んだのはスペインが誇る大学者 Ramón Menéndez Pidal の孫に当たる Diego Catalán の *The End of the Phoneme /z/ in Spanish* WORD 13.283-322 (1957) である。この論文は Catalán が Wisconsin 大学に客員教授として招かれて滞米中にスペイン語で書いて、それを友人の Karl J. Reinhardt が英訳したものである。Catalán はまず /z/, /d̥z/, /s/ の無声化の原因を調音上の弛緩によるとする Amado Alonso の説 (前記 *De la Pronunciación* の pp.379-380 を見よ) に反対し、この現象は音声学的な性質を有するものではなく、むしろ当時のスペイン語の体系内に生じた音素論上の危機の問題だとしている。/d̥z/ の無声化は彼によれば有聲の歯擦音を持たない非常に革新的な旧 Castilla の方言が 16 世紀の第 3 半期に Madrid や Toledo に浸透し、首府 Toledo の伝統的ないわゆる“標準語”にとって代ったことによるのだそうだ。Catalán の Amado Alonso に対する反論はさらに続き、Alonso の /d̥z/ がその有聲性を失った後でも「半世紀の間—— 1620 年まで—— /fs/ と /d̥z/ とは別の特徴によって音素論的対立をしていた。」という説が次に槍玉に上がる。Catalán によれば /d̥z/ がその有聲性を失ったとたん両者の対立は失われたのである。しかもいったん首府 Toledo がこの傾向の前に陥落するや、あとはブレーキがきかなくなり、特にスペイン東部 (Murcia や Valencia 等) への同傾向の進出が目覚しかった。ただし Extremadura 北部ではこの傾向に対するいささかの抵抗があった。Andalucía

ではどうか？ ここでは16世紀の中葉でも /d̄z/ はまだ有声であり、従って /f̄s/ : /d̄z/ の対立は保たれていたわけだが、その対立が消失する前に、むしろ /f̄s/ : /d̄z/ と /s̄/ : /z̄/ との対立が消失してしまったのである。そこへ Toledo 王国の影響で /f̄s/ : /d̄z/ の対立が消失したために四つの歯擦音素は僅か一つに減ってしまったことになる。ここで我々には一つの大きな疑問が残る。つまりなぜ首府のスペイン語が北部の一方言の前に道を譲らねばならなかったのかがそれである。これはもはや当時の社会や文化と関連した問題であり、Catalán 自身もこの疑問には答えていない。それにしてもなぜ北部の方言には有声の歯擦音が欠けてしまったのかという疑問が残る。ここで気をつけねばならないのは Toledo の“標準語”に北部の一方言がとって代った原因と、のちに現在のスペイン語の音素体系を形成するに至った北部の一方言の成因とは全く別々に考えられねばならないと Catalán は結んでいる。

Diego Catalán はこれら二つの重要問題を我々に提起しただけでその論文を了えてしまっている。それも無理はない。事実これら二問題の解決は相当困難である。むしろ Catalán の場合 Amado Alonso に対する前述二つの反論から付随的に引出された問題提起であったのかも知れない。それにしてもこの Catalán という人はよほど Amado Alonso とは意見が合わぬと見え、後述の El Ceceo-Zeceo al Comenzar la Expansión Atlántica de Castilla, BOLETIM DE FILOLOGIA, 16 306-334 (1957) も Alonso の「中南米のスペイン語と Andalucía 方言とは無関係」という説に対する反論である。ところで第一の問題について Alarcos はその Fonología Española¹, Madrid, 1959 の p.260 において、これはもはや言語学的資料にではなく、歴史的・社会的資料に基づかねば片附かない問題だと

Catalán と同趣旨のことを述べている。ただし Catalán と違う点はそのあとに付加えて曰く、「しかしながら新しい体系がそれまでのかなり乱雑で非経済的な体系を特に歯と軟口蓋との中間の部分において一部分構成し直すに至ったこと、つまり恐らくは古い体系内の弱点こそ新しい体系が勝利を博すための(受動的)条件であったことも忘れてはならない」と述べていることである。つまり無声の歯擦音素に例をとってこれを説明するならば、/s/ (</f̄s/) と /s̄/ と /ʃ/ とでは三者があまりに近接し過ぎていて音素体系としては理想的とはいえない。だから /s/ をさらに下げて /θ/ とし、/ʃ/ についてはそれまで広いあきまを形成していた軟口蓋部へ後退してもらい /x/ としたのが旧 Castilla の方言であるとなるだろう。ずっと整然としたこの体系が Madrid や Toledo を支配していた古い体系より魅力的に思えたので、いなかの一方言が首都の“標準語”にとって代ることができたのである。もちろんこの説明は同現象発生的主要原因ということではできないけれども。またこのような歯擦音素体系の整理が可能となったかげには、これまた非常に部分的ではあるが、/f̄s/ と /d̄z/ のあいだ、/s̄/ と /z̄/ のあいだ、/ʃ/ と /ʒ/ のあいだに最小対立をなす語が非常に少なかった、いしかえればそれら有声歯擦音素の機能負担量が著しく小であったことも働いていることも忘れてはならない (Alarcos, Fonología, p. 262)。要するにここでは構造主義的説明がその効力を大いに発揮していることに注目すべきである。なお旧 Castilla の言語が新 Castilla のそれに打勝ったという事実の歴史的・社会的解明は目下のところしている人が少なく、筆者の知る限りではのちに出て来る Menéndez Pidal だけである。

第二の問題については一つ有力な解答がある。これを知るために我々が読んだ第三番目の

文献は Martinet の The Unvoicing of Old Spanish Sibilants, ROMANCE PHILOLOGY, 5 133-156 (1951) であるが、この論文は彼の Economie des Changements Phonétiques, Berne, 1955 の第 12 章に Structures en Contact : le Dévoisement des Sifflantes en Espagnol と題してフランス語に訳し直して転載されて居り、我々はこの後者の方に眼を通した。ここでは前述のような /dʒ/, /z/, /ʒ/ の低い機能負担量については何ら言及されていない。また Jungemann の La Teoría del Sustrato y los Dialectos Hispano-Romances y Gascones, Madrid, 1955 の第 14 章 El Ensordecimiento de las Antiguas Sibilantes Sonoras Españolas も Martinet と同趣旨のことを述べていることを附記しておく。(注 1)

Martinet は中世末期スペイン語の歯擦音の無声化は原初 Castilla 語に対するバスク語の影響によるものだとしている。次の二つの表を比較してみよう。

〔原初ロマンス語歯擦音〕

無声破裂音	f̄s	ʃ̄	} 又は
有声破裂音	d̄z	d̄ʒ	
有声摩擦音	z̄	ʒ̄	
無声摩擦音	s̄	ʃ̄	

〔中世末期バスク語歯擦音〕

無声摩擦音	s	s̄	ʃ
無声破裂音	f̄s	f̄s̄	f̄ʃ

両体系の無声歯擦音どしは語似しているからバスク語民は Castilla 語の無声歯擦音を容易に発音できたに違いない。ところが有声歯擦音を欠いている彼等は d̄z, z̄ を f̄s, s̄ で代用し、(d̄ʒ) を ʃ̄ または ʃ̄ で代用したことだろう。この現象はバスク地方の辺境地帯ばかりか、ムーア人退却後バスク人が再移住した旧 Castilla の諸地方 (Burgos の南方まで) にも起った。この説がもし正しいとすれば、F > h の現象、B と V との合一を加えてスペイン語史上の三つの現象がバスク語と Castilla 語との交渉をその原因として持つことになり、少なくとも筆者には全面的に信用するわけにはいかないように思えるのである。また Dámaso Alonso がその著 Fragmentación Fonética Peninsular, Madrid, 1962 の pp. 88-89 において、また Jungemann が前掲の著の pp. 331-32 において批判しているように、実はこの無声化現象は Aragón 方言、Asturias-León 方言、Galicia 方言などにも起っているのである。これらの諸方言にまでバスク語の影響が及んだと主張する勇士は一人もいないだろう。もっとも Castilla 語の影響がそれらの諸方言に及んだと主張する人はいるかも知れない。

この辺で眼を Andalucía 方言に転じることにして。我々がそのために読んだ文献は Lapesa の Sobre el Ceceo y el Seseo Andaluces MISCELÁNEA HOMENAJE A ANDRÉ MARTINET I. 67-94 (1957) である。彼は当時の Sevilla が政治的にも社会的にも Castilla とは異った独自の

(注 1) ただし Jungemann が Martinet と異なる点は低地ラングドックの例にヒントを得て破裂音素 b, d, g と摩擦音素 β, δ, r とが b-β, d-δ, g-r に合一したことにより、破裂音 d̄z や摩擦音 z̄, ʒ̄ (d̄ʒ) が体系内における支柱を失った、その結果無声化が起ったと強調していることにある。

言語を生むのに適当な環境であったことから説き起こす。歯擦音に関していうならば /ts̄/, /d̄z̄/, /s̄/, /z̄/ の四音素はまず有声と無声二種の摩擦音 /s/, /z/ に減じ、のちにこれが /s/ (その中には [θ] を含む) だけになった。このうち第一の変化段階は 15 世紀末から 16 世紀始めにかけて起ったことが文字の誤記によって明らかになっている。ところがここで Lapesa は実にすばらしい新発見をした。彼は 16 世紀および 17 世紀前半には Andalucía における歯擦音の混同は常に ceceo, zeceo という術語によって表現され、seseo という術語は決して用いられなかったことに気がついたのである。どうも ceceo, seseo という用語は現在とは違う意味を持っていたらしい。つまり /ts̄/ と /d̄z̄/ は 1565 年から 1584 年のあいだに Sevilla で前舌背・歯音または舌尖・歯音の [s], [z] という音声的実現になっていたが、これらが /s̄/ (注 2) や /z̄/ の舌尖・歯茎音的調音法までも吸収してしまった。16 世紀の人々はこの調音法を奇異に感じて ceceo ないしは zeceo と命名したと Lapesa は考える。これはなかなか興味深い発見である。現在のスペインの学界でもこの説は正論と認められているようである。さらに興味深いことには Andalucía ではもともと /ts̄/ と /d̄z̄/ から派生した [s], [z] 音が /s̄/ と /z̄/ との保持のために転用され、文字 ç, z を表わす音としては (また文字 -ss-, -s- からそれらを区別しようとする意識も働いて) [θ] が用いられるに至ったのである。もちろんのちになって [s] 音と [θ] 音とは音素として対立する力を失ってしまった。それ故に現在 Andalucía では /s/ を常に [θ] として実現させる地方と [s] として実現させる地方とがあるのである。前者が今でいう ceceo, 後者が seseo であることはいうまでもない。最後に Lapesa が出す結論も実にスペイン人学者的でおもしろい。すなわち彼は一言語事実を説明するには純粋に言語学的状況の他に歴史的な事実の加味が必要とされ、前者だけでは前述のような歯擦音の変化がなぜ Andalucía に中世末期に起り、なぜ 16 世紀にそこで勝利を博し、なぜその種々の変化形態がそれぞれ相異った社会的・地理的地層を獲得したかを説明できない、Andalucía の歯擦音の処理法が Castilla のそれと異なるのは生活方法の相違、ムーア人との国境が近かったこと、Castilla との交流が地理的に困難であったこと、独自の首都 Sevilla がだんだんとその重要性を増して行ったことなどに理由があると結んでいる。こういった説明は構造主義を標榜する人にとってはかなりショックであろう。筆者はこの問題についていかなる態度をとるか、これについてはこの論文の最後の部分まで懸案として残しておこう。

次に 97 才の老大家 Ramón Menéndez Pidal の Sevilla frente a Madrid — Algunas Precisiones sobre el Español de América MISCELÁNEA HOMENAJE A ANDRÉ MARTINET III. 99-165 (1962) を紹介しよう。副題からも分るとおり、いよいよ我々の話題は中南米にも波及することになる。彼はまず、筆者が『中南米のスペイン語 (その四) 「中南米のスペイン語 (その一) substratum について」に対する補足』 HISPÁNICA 10. 27-36 において紹介した彼の Modo de Obrar el Sustrato Lingüístico REVISTA

(注 2) ラテン語の s が舌尖歯茎音であったことは Alvaro Galmés de Fuentes の著書 Las Sibilantes en la Romania, Madrid, 1962 によってみごとに証明されている。

DE FILOLOGÍA ESPAÑOLA 34. 1-8 (1950) 中の「言語の一変化過程は何世紀にもわたって継続するが、それが日の目を見る前に必ず潜在的状態を経過する。」という彼独自の説をここでも紹介したあと、我々にとって実に幸運なことに、首都 Toledo の“標準語”が旧 Castilla の一方言の影響の強かった Madrid の言語になぜ道を譲らねばならなかったか、その社会的・文化的説明を行っている。少し長くなるが、その部分を転載してみる。

代々北方系である Gonzalo Fernández de Oviedo が 1478 年に、また don Alonso de Ercilla が 1533 年に Madrid で生れた事実が物語っているように、昔から Madrid は北からの移民を歓迎していた。Felipe 二世は Madrid 遷都 (1561) の際、詮索すればお互い異質であろうがとにかく旧 Castilla 出身の人々を大勢お供に連れていたという。これには中世の Segovia に朝廷があった時代を考慮に入れないでも、Madrid 遷都以前に Valladolid にも長い間朝廷があったことが大いに影響している。たとえば Carlos 五世、彼は Barcelona や Toledo にいた期間の二倍だけ Valladolid に居住していた。Felipe 二世は 1527 年同地で呱呱の声をあげた。彼の長子 Carlos も同地で生れているし、また彼は皇太子の時からかぞえて 9 年間彼の朝廷をそこに置いていた。こういったことのために新しい Madrid の朝廷の役職は旧 Castilla 出身の連中によって多く占められ、このことがまた新しく旧 Castilla の人々が Madrid に移住することを促進した。これに比べれば南方からの移住者などもの数ではない。16 世紀のあいだじゅう朝廷の役人には Vizcaya 人やその他の旧 Castilla 出の人々、特に la Montaña の人々が多かったというのは有名な事実である。これに関して文学の上での興味ある事実を思い出す必要がある。前述の詩人 Ercilla の両親はそれぞれ Vizcaya 県の Bermeo と Logroño 県の出身であったが、二人とも Madrid の朝廷で職を得ている。また Quevedo の父親は la Montaña の出身で、Maximiliano 二世に仕えたのち、1578 年に Madrid に帰り、Ana 王妃の秘書となり、Carlos 五世の朝廷に仕えるべくこれまた la Montaña から Madrid に出て来た人の娘と結婚している。Calderón の両親もやはり Santander 県 Reinosa の出で、Felipe 二世の朝廷に仕えた。詩人 don Antonio de Mendoza は子供の頃 Santander 県の Castro Urdiales から Felipe 三世の宮廷に入っている。Lope de Vega の父親は la Montaña から Valladolid へ、さらに 1561 年 Madrid へ移っている。これら五つの文学上の例を見ても Madrid が半島南部に対する北方言語の普及の上でつとめた役割は今や明白である。Sevilla びいきの Herrera が非難しているように、たしかに Madrid の人種は雑多であったが、その雑多なものの根底には一つにまとまった強力な要素が流れていたのである。Toledo が新 Castilla の保守的な言語を忠実に守ったのに対し、Madrid は旧 Castilla の新しい言語と容易に妥協したのである。Madrid にはその誇る前記五人の文学者に加うるに、旧 Castilla 全体でみて Santa Teresa、Acosta 神父、San Juan de la Cruz、Prudencio de Sandoval 師、el Pinciano 等の文化人がいたのに対し、Toledo はその足許にも及ばず、文化的に完全に圧倒されたのである。けっきょく全ては Madrid の新朝廷が新しい北方言語を容易に受入れたという事実にあるといえよう。

以上で Menéndez Pidal の論文の該当部分の要約を終るが、このような歴史的・

社会的・文化的背景があったことを全く考慮しないとすれば、それはやはり誤りであるという他はない。さらに彼の論文は続く。北部スペインからの新興 Andalucía の独立的傾向は言語の上にも顕著に現われ、それだけでなく旧 Castilla 産の新言語によって圧迫されていた Toledo の言語に南方からも圧迫を加えるに至る。Sevilla の ceceo は 16 世紀初頭に Bernal Díaz の言によって最初に確認された。この ceceo を主たる特色とする andaluz が Granada 陥落等により各地に拡がり始める。ただしこの場合の ceceo とは前述 Lapesa のいう意味であり、当然現在の seseo をも含んでいる。この andaluzこそ中南米スペイン語形成の基礎となった言語であると Menéndez Pidal はいい切り、例を México, Perú その他にとってその証明をする。

この中南米スペイン語と andaluz との関係は、土語と中南米スペイン語との関係、中南米スペイン語におけるアルカイズムの問題(特に voseo) とともに、中南米スペイン語研究上の一大問題であり、「中南米スペイン語は andaluz とは別個に成立した言語である。」とする Henríquez Ureña の説が 1920 年代に出、これを支持する Amado Alonso とこれに反対して両言語間の密接な関係を強調する一派との間で大論争が行われた。(注 3) しかし現在では上記 Menéndez Pidal の長大な論文を始めとして、Boyd-Bowman の Regional Origins of the Earliest Spanish Colonist of America, PMLA 71. 1152-72 (1956), Lapesa の Sobre el ceceo y el seseo en Hispanoamérica REVISTA IBEROAMERICANA 21. 409-16 (1956), 同じく El Andaluz y el Español de América PRESENTE Y FUTURO DE LA LENGUA ESPAÑOLA II. 173-182 (1964), Catalán の El Ceceo-Zequeo al Comenzar la Expansión Atlántica de Castilla, BOLETIM DE FILOLOGIA, 16. 306-334 (1957), Canfield の La Pronunciación del Español en América, Bogotá, 1962 等々、どうも Henríquez Ureña, A. Alonso 側の旗色はすこぶる悪いようである。このうち Lapesa のいわんとするところは、「Henríquez Ureña が 1600 年以前に中南米に移住したスペイン人 13,948 人 についてその出身地調べを行い、そのうち僅か 33% が andaluces であったと 1932 年に発表しているが、この統計には重大な誤りがある。Bowd-Bowman の統計はこの三倍に近い四万人の出身地を調べ、しかも初期の Antillas 諸島征服期を 1493 年から 1509 年までと 1510 年から同 19 年までの二期に分けて調査をしている。その結果は第一期には andaluces が 60% を占めていることが分った。この連中がこの時期に中南米スペイン語の基層を形成し、後続の連中がこれに倣ったのだ。」ということにある。(注 4) 他方 Catalán は「16 世紀前半に Sevilla には ceceo

(注 3) 筆者の「中南米スペイン語とアンダルシーヤ方言との関係」ラテン・アメリカ経済研究 5 101-111 (1960) を参照されたい。

(注 4) なお Lapesa は Henríquez Ureña や Amado Alonso のような中南米スペイン語の独自性を唱える人々の背後には中南米諸国のナショナリズム、本国スペインからの精神的独立の気運がはたらいていたと述べているが、なかなか興味深い意見である。

を特色とする方言を話す階層があり、文字の混同の上からは15世紀末からすでにそれが認められる。従って中南米の ceceo が Andaluçia から独立して起ったとする Amado Alonso の説には賛成できない。」と主張している。

さて以上中世末期から近世にかけてのスペイン語諸歯擦音素の変遷のあとをふり返り、それに付随した諸問題点を指摘し、そのうち一応の解決ができているものについてはその解決をも示した。しかし未解決で、未だに論争的になっている問題もある。だが解決・未解決は目下の我々にとってはさしたる問題ではない。むしろ我々がより強く関心を持ったのは音声変化の原因は何かという通時音素論の根本問題であった。Alarcos はその諸原因を次のように分類している。

I) 外的原因

a) 人間の性質につきものの原因……調音上の見地から音素論的に不適当と見られる対立の除去

b) 異った地理的・社会的環境への一言語の移植……素地の問題

II) 内的原因……諸音素対立を混同なく保たんとする要請。

少し説明を加えるならば、I) a) はもっと具体的には最小努力の法則、生理的傾向、音声器官の惰性、音声器官の不均衡等になるだろう。I) b) は上記のほかは風土的、地理的、政治的、社会的要因を考えるべきであろう。II) は機能上の必要と構造上の圧力の二つから成る。Martinet によれば音声変化は I) a) と II) との対立または二律背反によって規制されるという。スペイン人の学者には Lapesa のように I) b) のみを重要視する傾向が見られるが、本来の領域の完全な解明を怠って、I) b) をみだりに採用することはきわめて危険であり厳に慎しむべきである。(注5)

(東京外国語大学 助教授)

(注5) この部分については研究社刊「英語学ライブラリー(31)」に相当するマルティネ著、黒川新一訳、「機能構造・音韻変化——通時音韻論要説——」の中の訳者による「通時音韻論について」を参照した。